

8月予報（全13枚）

病防第62号
平成19年8月1日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
平成19年度発生予察情報第5号を下記のとおり発表したので送付します。

平成19年度発生予報第5号（8月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成19年7月20日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	40	30	30
降水量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	40	30	30

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
早植 水稲	穂いもち	やや少	並	大豆	ハズエンヨウ	並	並
	紋枯病	やや多	並	茶	炭疽病	やや多	やや多
	トビイロウンカ	やや多	並		チャノカクエンハチ	やや多	やや多
	コブノメイガ	並	並		チャハマキ	並	並
	カメムシ類	やや少	やや少		チャノホソガ	並	やや多
普通期 水稲	葉いもち	並	並		チャノヤブアザミ	並	並
	紋枯病	やや多	並		チャノミドリキコバエ	並	並
	トビイロウンカ	やや多	並		カザリハダニ	やや少	並
	セジロウンカ	並	やや少	かんきつ	かいよう病	やや多	並
	コブノメイガ	多	やや多		黒点病	並	並

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
かき	ミカンハダニ	やや少	並	イチゴ (育苗床)	うどんこ病	並	やや多
	チャノコアザミウマ	並	並		炭疽病 (雨よけ無し)	やや多	並
	カガラムシ類	並	並		炭疽病 (雨よけ)	並	並
ナシ	うどんこ病	並	並		ハダニ類	並	やや少
	ハダニ類	やや少	少				
カキ	炭疽病	並	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	並	並
果樹全般	果樹カラムシ類	少	少		コナガ	並	並
夏秋 トマト (高冷地)	葉かび病	やや少	少	夏秋 果菜類	コジラムシ類	やや多	やや多
	灰色かび病	やや多	やや多		アザミウマ類	並	並
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	やや多	多	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	並		オオタバコガ	並	並
	褐斑病	やや少	少				

3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

水稻（早植）

1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、穂いもちの発病株率 1.3 % (平年 9.2 %)、発病度 0.3 (平年 2.3) と平年より少ない発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の穂いもちの発生は概ね平年並である。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 穂いもちは発病後の防除効果が劣るため、防除適期に防除を行う。粒剤では、出穂前の所定の使用時期に遅れないように散布する。粉剤、水和剤等では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

2) 紋枯病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 5.5 % (平年 3.1 %) と平年よりやや多い発生であった。

イ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率 20 %）に達した場合は、

粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.17 頭 / 株(平年 0.04 頭)と平年より多い発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)における予察灯調では、平年よりやや多い誘殺数である。

(3) 対策 ア 8月上旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合には、幼虫発生初期に防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に付着するように散布する。

4) コブノメイガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、株当たり巻葉数 0.1(平年 0.3)と平年よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員の報告では、地域間差があり 7月の発生は平年比やや多～やや少である。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

5) カメムシ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 早植水稻周辺の雑草地等における6月の調査では、平年よりやや少なかった。

イ 生産環境研究所(合志市)における予察灯の調査では、アカスジカスミカメは平年より少ない誘殺数である。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並である。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するために行わない。

イ 周辺より出穂が早い場合は、飛来が多くなりやすいので注意する。

水稻(普通期)

1) 葉いもち

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 0.2 % (平年 0.2 %)、発病度 0.1 (平年 0.1) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年よりやや少ない。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 葉いもちが発生し、上位葉への進展が見られる場合は薬剤を散布する。

2) 紋枯病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 0.5 % (平年 0.1 %)、発病度 0.1 (平年 0.1) と平年よりやや多い発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は概ね平年よりやや少ない。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 粒剤の防除適期は、出穂 30 ~ 10 日前頃であるが、薬剤の種類によって防除適期が異なるため注意する。

イ 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準(発病株率 20 %)に達した場合は、

粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.01 頭 / 株(平年 0.01 頭)と平年並の発生であった。
イ 生産環境研究所(合志市)における予察灯調査では、平年より多い誘殺数である。

(3) 対策 ア 8月上旬に「20 頭以上 / 100 株」、または8月中旬～下旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合は、幼虫発生初期に防除を行う。

4) セジロウンカ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1.6 頭 / 株(平年 1.7 頭)と平年並の発生であった。
イ 生産環境研究所(合志市)と天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、平年よりやや少ない誘殺数である。

5) コブノメイガ

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 7月に行った特別調査では、被害株率 44.0 % (平年 8.3 %)と平年より多い発生であった。

イ 病害虫防除員の報告では、地域間差があるが、7月の発生は概ね平年よりやや多い。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 本年は7月1半旬～2半旬にかけて断続的に飛来があったと思われる。7月1～10日を起算日とした有効積算温度による熊本市での次世代発蛾最盛期は8月1～9日(7月24日現在、アメダスデータ)と予想される。

イ 発生が多いほ場では、発蛾最盛期(粒剤)または発蛾最盛期の1週間後(粉剤及び液剤)に防除を行う。

ウ 薬剤散布にあたっては使用基準を遵守し、周辺環境等へ飛散の無いよう十分注意する。

エ 詳細は7月27日付け注意報第1号を参照すること。

大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、播種が遅れている地域が多く、発生は認められなかった(平年 0.1 頭 / 10 株)。

イ フェロモントラップ調査においては、生産環境研究所(合志市)では平年比やや多、い業研究所(八代市)では平年より少ない発生であったが、高原農業研究所(阿蘇市)では前年より多い発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はまだ認められていない。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 薬剤による防除は、老齢幼虫に対し効果が得られないため、白変葉を発見したら幼虫が分散する前に防除を行う。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、病葉数は 28.3 葉 / m² (平年 16.3 葉 / m²)と平年より多い発生であったが、園によって差が見られた。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想で

ある。

- (3) 対策 ア 常発地では摘採残葉の発病状況等に注意するとともに、秋芽の開葉初期に防除を行う。

2) チャノコカクモンハマキ

- (1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は 3.0 枚/㎡ (平成 0.4 枚/㎡) と平成よりやや多い発生であった。

イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップでは、7 月は平成並の発生であったが、7 月 4 半旬に平成より高いピークが見られた。

ウ 茶業研究所 (御船町) のフェロモントラップでは、7 月は平成並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平成比やや多～並であった。

- (3) 対策 ア ほ場を見回り発蛾最盛期から 7 ～ 10 後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。特に、三番茶摘採後が防除適期となる。

3) チャハマキ

- (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は 0.3 枚/㎡ (平成 0.1 枚/㎡) と平成並の発生であった。

イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップでは、7 月は平成よりやや少ない発生であった。

ウ 茶業研究所 (御船町) のフェロモントラップでは、7 月は平成よりやや少ない発生であった。

- (3) 対策 ア チャノコカクモンハマキに準じる。

4) チャノホソガ

- (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は 1.7 枚/㎡ (平成 5.1 枚/㎡) と平成より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップでは、7 月は平成より多い発生であった。

ウ 茶業研究所 (御船町) のフェロモントラップでは、7 月は平成並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平成並～やや少であった。

- (3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の秋芽萌芽期から 1 ～ 2 葉期に防除を行う。

5) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は 4.7 % (平成 2.5 %) と平成よりやや多い発生であった。

イ 生産環境研究所 (合志市) の黄色粘着トラップでは、7 月は平成並の発生であった。

ウ 茶業研究所 (御船町) のたたき落とし調査では、7 月は平成並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平成比やや多～並であった。

- (3) 対策 ア 加害は新葉のみ行われるので、チャノホソガに準じて防除を行う。

6) チャノミドリヒメヨコバイ

- (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は 3.3 % (平成 3.8 %) と平成並の発生であった。

イ 茶業研究所 (御船町) のすくい取り調査では、平成より少ない発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

(3) 対策 ア チャノホソガに準じて防除を行う。

7) カンザウハダニ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉は認められなかった(平年0.9%)。

イ 茶業研究所(御船町)の寄生葉率調査では、7月は平年より少ない発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

(3) 対策 ア 通常、8月下旬ごろから発生が多くなるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら防除を行う。発生が多くなってからでは、どの薬剤も効果が得られないため、発生初期の防除に心がける。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カンキツ

1) かいよう病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率2.3%(平年4.1%)、発病果率1.0%(平年7.2%)と平年よりやや少ない発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹の甘夏)では、7月6半旬の春葉の発病率が3.8%(平年0.7%)、果実の発病率が60.0%(平年39.8%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多であった。

エ 梅雨期の連続降雨と台風4号の強風雨が感染に好適な条件であった。

オ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 夏秋梢のミカハダガの食害痕に、発病しやすいので防除を徹底する。

イ 発病した葉・枝・果実はなるべく剪除し、伝染源密度の低下を図る。

ウ 強風雨(風速毎秒6m以上)は傷を作り、病原菌の侵入門戸となるので防風対策(ネット等)を整備する。

エ 梅雨明け後の無機銅剤散布は、品種や気象条件によって果実に薬害(ヌメ病)が生じるので注意する。

2) 黒点病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率6.6%(平年5.7%)と平年並の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹の興津早生)では、7月6半旬の果実の発病率は88.0%(平年85.1%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 伝染源は枯枝で、8月の枯枝剪は後期感染防止の重要な作業である。なお、枯枝を園内に放置していると発病が多くなるので園外に処分する。

イ 定期的に園を見回り降水量200～250mmまたは前回散布から25～30日経過したら防除を行う。

3) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率5.6%(平年10.4%)と平年比やや少の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹)では、7月5半旬の寄生葉率は0.0%(平年8.4%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、8月の降水量は平年並である。

(3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準はメス成虫の寄生葉率 30 ~ 40 %、10 葉当り 5 ~ 10 頭である。

イ ハダニの薬剤防除は抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害果率 3.4 % (平年 1.5 %) と平年比やや多であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並 ~ やや少であった。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並である。

(3) 対策 ア 被害果は摘果する。

イ 発生程度の調査は、展着剤あるいは洗剤を 5,000 ~ 10,000 倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実 (100 果) を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実体顕微鏡で虫数を調査する。調査の結果 15 頭以上を確認したら直ちに防除する。

5) カイガラムシ類 (アカマルカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった。

イ 気象予報によると、8月の降水量は平年並である。

(3) 対策 ア アカマルカイガラムシの第二世代幼虫期が7月下旬 ~ 8月上旬、ナシマルカイガラムシの第二世代幼虫期が7月下旬 ~ 8月中旬であるので、例年発生が見られる園は、この時期に薬剤を散布する。

ナシ

1) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病を認めなかった (平年の発病葉率 0.1 %)。

イ 気象予報によると、8月の降水量は平年並である。

(3) 対策 ア 収穫期から収穫後に多発生して早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。

2) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 0.7 % (平年 3.5 %) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並 ~ 少であった。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並である。

(3) 対策 ア 要防除水準は、雌成虫の寄生葉率 20 % 以上、1 葉当り 1 ~ 2 頭である。

イ ハダニ類の薬剤防除は、抵抗性の発達を防ぐため同一系統の薬剤の連用を避ける。

カキ

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多であった。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。

イ 台風後多発するので、襲来前後の防除を徹底する。

果樹全般（カキ、ナシ、カンキツ類等）

1) カメムシ類

（1）発生量：少

（2）根拠 ア 生産環境研究所（合志市）、果樹研究所（宇城市）および天草農業研究所（天草市）における予察灯やフェロモントラップの誘殺数は平年比少であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

（3）対策 ア カメムシの発生は地域差が大きいので、注意を怠らず園をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

夏秋トマト（高冷地）

1) 葉かび病

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 2.3 %（平年 13.5 %）と平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 被害葉や老化葉を除去し、通風、採光を図る。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

2) 灰色かび病

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 54.3 %（平年 20.4 %）と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比多～やや多であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。

イ 果実に付着した花、被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション散布を行う。

夏秋ナス（平坦地）

1) すずかび病

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 9.0 %（平年 0.2 %）と平年比多の発生であったが、一部ほ場で発生が多かった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。

イ 初期の発病葉は早めに除去する。また、ハウスやその周辺に病葉を放置すると伝染源になるので、摘除後は速やかに処分する。

ウ 薬剤防除は発生初期に行う。

夏秋キュウリ（高冷地）

1) ベと病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 34.0 %（平成 25.7 %）で平成並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平成より低く、降水量は平成並の予想である。

（3）対策 ア 多発すると防除が困難なので適正防除を行い、発病したほ場では下葉の老化葉や被害葉を除去するなどほ場衛生に努める。

イ 肥培管理を良くし肥料切れしないようにする。

2) 褐斑病

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 0.0 %（平成 8.1 %）と平成比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平成より低く、降水量は平成並の予想である。

（3）対策 ア 窒素肥料の多用を避け過繁茂にならないようにする

イ 多発後の防除は困難なので、発病初期の防除に努める。

ウ 被害葉は伝染源となるため早めに処分する。

イチゴ（育苗床）

1) うどんこ病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 7.1 %（平成 3.0 %）と平成並の発生であったが、一部ほ場での発生が多かった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は宇土市で平成よりやや多く、その他の地域では平成並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平成より低く、降水量は平成並の予想である。

（3）対策 ア 今後、菌そうが消失して目立たなくなるが、盛夏でも病原菌は潜在感染しており、秋になると再び発病する可能性がある。早めの防除で、菌密度を下げておく。

イ 発病葉や不要な下葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分し、薬剤散布は葉裏に十分かかるように散布する。

ウ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) 炭疽病

（1）発生量：やや多（雨よけ無し）並（雨よけ）

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 1.3 %（平成 3.1 %）と平成並の発生であったが、発病は雨よけ無しほ場のみであった。7月上旬の長雨により、雨よけ無しほ場で炭疽病菌がまん延した可能性がある。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比やや多～やや少で、発生に地域差があった。

ウ 気象予報によると、8月前半は平成に比べ曇りや雨の日が多い予想である。

（3）対策 ア 炭疽病菌の胞子は雨滴によって伝搬するため、育苗床はビニール被覆によ

る雨よけを行う。

イ 適切なかん水を行う（頭上散水の禁止、天候に合わせた適量かん水）。かん水は、夕方には培土表面が乾くように午前中心に行う。

ウ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や摘葉後には感染しやすいので、防除を徹底する。

エ 罹病株があると降雨やかん水により急速にまん延するので、排水に留意し、被害茎葉や被害株は速やかに処分し、伝染源を少なくする。

3) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 8.3 %（平年 1.8 %）と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期の防除を徹底する。

夏秋キャベツ（高冷地）

1) 細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病等）

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、黒腐病は発病株率 3.0 %（平年 6.0 %）と平年比やや少であったが、一部ほ場で発生が多かった。軟腐病は発病株率 1.3 %（平年 1.0 %）と平年並。黒斑細菌病は発病株率 0.0 %（平年 0.0 %）と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に散布を行う。

2) コナガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生株率 13.3 %（平年 17.1 %）と平年並であった。

イ フェロモントラップでの誘殺数は、阿蘇市波野で平年並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期の防除を徹底する。

ウ 収穫残さは発生源となるので直ちに処分する。

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、高冷地のトマトでは寄生葉率が 15.3 %（平年 12.9 %）と平年並、キュウリでは寄生葉率が 23.3 %（平年 11.1 %）と平年比やや多

や多であった。また、平坦地のナスでは寄生葉率が 23.0 % (平成 16.2 %) と平成比やや多であった。なお、確認された種は高冷地のトマトではオンシツコナジラミのみ、キュウリではオンシツコナジラミ主体、平坦地のナスではタバココナジラミ主体であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は高冷地で平成比やや多～並、平坦地で平成並であったが増加傾向であった。

ウ 気象予報によると、8 月の気温は平成より低く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

2) アザミウマ類

(1) 発生量 : 並

(2) 根拠 ア 7 月の巡回調査では、寄生葉率が平坦地のナスで 0.3 % (平成 1.8 %) と平成比やや少、高冷地のキュウリで 6.0 % (平成 0.9 %) と平成比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は概ね平成並であった。

ウ 気象予報によると、8 月の気温は平成より低く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

ウ ミナミキイロアザミウマはメロン黄化えそウイルスを媒介するので、キュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期からアザミウマ類の防除を徹底する。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量 : 並

(2) 根拠 ア 7 月の巡回調査では、ナス、キャベツ、イチゴ、トマトでは発生は見られなかった (平成の寄生株率、ナス 0.3 %、キャベツ 1.3 %、イチゴ 0.0 %、トマト 0.1 %)。

イ フェロモントラップ調査においては、生産環境研究所 (合志市) では平成並、い業研究所 (八代市) では平成より少ない発生であったが、高原農業研究所 (阿蘇市) では前年より多い発生であった。また、阿蘇市波野では平成より多い発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は概ね平成並であった。

エ 気象予報によると、8 月の気温は平成より低く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、ナスで寄生株率 0.3 % (平年 0.0 %) で平年並、トマトでは発生は見られなかった (平年の寄生株率 0.1 %) 。

イ フェロモントラップ調査においては、生産環境研究所 (合志市) では平年より多い発生、い業研究所 (八代市) では平年より少ない発生であったが、高原農業研究所 (阿蘇市) では前年より多い発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は概ね平年並であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より低く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

「 トマト黄化葉巻病 」 徹底防除 ！ ！

トマト黄化葉巻病は育苗期に感染すると被害が大きくなりますので、今後の発生を抑制するためには、以下の防除対策を徹底することが必須です。

< 育苗期から生育初期の防除対策 >

播種・定植前の管理：

施設周辺及び内部の雑草や野良生えトマトは、ウイルスの伝染源、タバココナジラムの生息・増殖場所となるので、必ず播種や定植の 10 日前までに除去する。育苗期から栽培期間中も定期的に除草する。

施設内へのタバココナジラム侵入防止：

育苗施設やハウス等の開口部 (天井、サイド、換気部など) には目合い 0.8 mm 以下の防虫ネットを必ず設置し、タバココナジラムの侵入を抑制する。特に、育苗時に感染すると感染株は収穫皆無になる恐れがあるため被覆を徹底する。なお、目合いを小さくするほど侵入阻止効果は高いが、高温対策に留意する。

また、育苗ハウスは近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを 150 cm 幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。

黄色粘着トラップを施設内に設置し、コナジラムの早期発見に努める。

感染源の除去：

発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

薬剤防除：

防虫ネットのみでは、タバココナジラムの侵入を完全には防げないため、薬剤防除を併せて徹底する。また、育苗期後半、定植時には粒剤を施用する。

(注意：農薬使用にあたっては、使用方法、使用時期、総使用回数等を厳守する。)

農薬安全使用上の留意

ポジティブリスト制が平成 18 年 5 月 29 日に施行されました。全ての農薬、作物に残留基準値が設定され、基準値を超えたものは流通が禁止されます。薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守すること。また薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底すること。

詳しい内容等については
生産環境研究所病虫害研究室（病虫害防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。